参考12

「雲仙岳の秘めたるパワー」P.22

雲仙岳と歴史・伝承①

●雲仙岳の立地と山容～縄文時代から古代～

雲仙岳そびえる島原半島は、西は外洋の東シナ海に面し、東は九州各方面へのアクセスルートである有明海に面した立地、そして三方を海に囲まれて高さ以上に立派に見える急峻な山容を背景に、古来、様々な海外文化がいち早く到来し、花開きました。
島原半島は、国内でも最も早く（縄文晩期）稲作が大陸から導入された地域のひとつとされ、それを示す原山遺跡（農村公園）や山ノ寺遺跡等があります。仏教も同じく大陸伝来ですが、名高い僧・行基によって大宝元年（701年）、温泉山満明寺が雲仙地獄のほとりに開かれ、天皇の勅願所として、その約100年後に開山された比叡山・高野山とともに“天下の三山”と称されました。
また、中国から日本に渡来する船にとっては、一番初めに見える高い山として渡海目標とされ、「日本山」とも呼ばれました。

この満明寺の沿革を記した「温泉山縁起」には、古事記・日本書紀に登場する“天孫降臨”にまつわる興味深い伝承が記されています。天孫降臨とは、天照大神の孫（天孫）の瓊瓊杵尊が天から地へ降臨したという神話で、降臨地としては日向国（宮崎県）の高千穂峡や高千穂峰が有力視されていますが、上記の伝承では瓊瓊杵尊は島原半島にて誕生し、その後に加無之呂（神代、当時の半島の中心地）から八代を経て日向国に向かった、というのです。他方、その八代の妙見宮（八代神社）には、古代に中国東岸部の寧波（一説には朝鮮半島南西部の百済とも）から妙見神が亀蛇に乗って海を越えて渡来し、一時期滞在した、という伝承があり、天草西岸に妙見浦、島原半島には妙見岳という地名があります。天孫降臨が大陸の高度な技術をもった集団（神）の日本への渡来を表現しているとすれば、上記２つの伝承は、古代の渡来人集団が東シナ海→天草→島原半島→八代という海上ルートで渡ってきた大きな流れを、それぞれ異なる形で伝えているものと言えるでしょう。

満明寺の本尊については、高麗（高句麗）から４人の王女が飛来し、阿蘇大明神の奨めで瓊瓊杵尊が去った跡地（雲仙岳）に鎮座し、四面大菩薩となったと伝承されています。その雲仙岳は、713年編纂の肥前国風土記には“高来峰”として登場しますが、全国に点在する“高来”地名の多くは高麗からの渡来にまつわる名とされます。

昭和２年頃の満明寺

九州三大祭の八代妙見祭
（左上は亀蛇）

以上の諸伝承は、古代の雲仙岳・島原半島が、朝鮮半島や中国と並々ならぬ深い関係で結ばれていたことを物語っています。

参考12

「雲仙岳の秘めたるパワー」P.23

雲仙岳と歴史・伝承②

●雲仙岳の立地と山容～古代から中世～

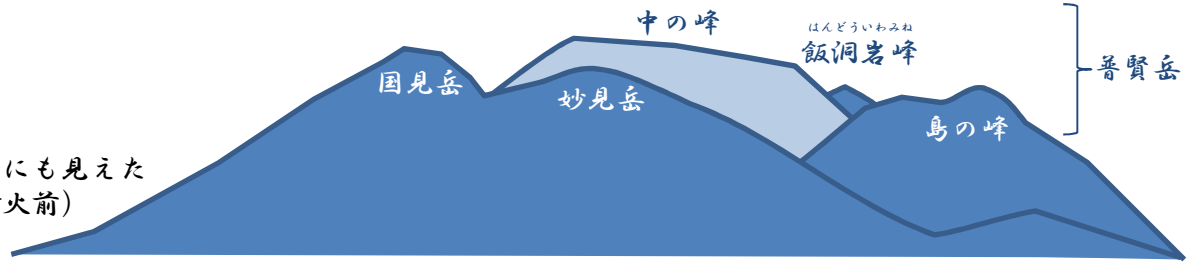
日本の山岳信仰は、仏教と神道の両方を取り込んだ“修験道（しゅげんどう）”の形で展開されました。温泉山満明寺が仏教的に四面大菩薩を本尊としたのに合わせるように、神道的には温泉神社が温泉四面神を祭神としていました。高麗の４王女飛来伝承を背景に、身一つに面（顔）四つとされた温泉四面神は、一説には普賢岳（中の峰）を中心に４つの峰が取り巻いていた当時の雲仙岳主峰群の山容と関連性があるとも言います。温泉神社は満明寺が開かれた頃に創祀され、同時に山麓の４箇所(諫早・吾妻・千々石・有家)に分社が置かれました。山麓の集落にて祈願ができるよう、分社はその後増やされて、現在でも半島内に17分社が残っています。

実はこの温泉四面神、九州島そのものを表す神とされているのです。古事記において、筑紫島（つくしじま）（九州島）には四つの面（地域）があるとされ、各地域を表す４柱（後に５柱とされた）の神々の名が記されており、その神々が温泉神社に祀（まつ）られています。これは、雲仙岳・島原半島が九州島の（精神的な）中心地であった時代があったことを示唆しています。その後、中世に入って13世紀初頭、モンゴル（元）が九州に攻めてきた元寇の際、温泉四面神が戦場に現れ、元軍の一身三面の勇士（神）を迎撃したとの伝説があり、弘安４年（1281年）には九州の総鎮守とされ、九州各地の武将の崇敬を集めたと言います。九州各地から遠望でき、九州島と同様に“四面”の物語のある雲仙岳は、いつしか九州島のシンボルとなっていったと言えるでしょう。

温泉神社（本宮↑と有家分社↓）

現在、全国第２位の生産量を誇る島原半島の素麺は、中世より地域産品となっていたようで、島原藩主（有馬家）から江戸幕府への献上品に含まれていました。次項で紹介する島原・天草一揆の後に瀬戸内の小豆島から伝来したとの説もありますが、それ以前に中国南東部（福建省）から伝来したとの説が有力視されています。当地の手延べ製法の工程・道具・器具が、小豆島とは異なり、福建省の線麺（ソーミェン）と同じであるとの調査結果があり、福建省から島原半島に渡って来た技術者によって直接伝えられた可能性が指摘されています。
雲仙岳からの湧水、有明海の塩、肥沃な山麓で生産される小麦、雲仙岳から吹き下ろす乾燥した風が、名産・島原素麺を生み出しました。

島原素麺



四方に顔（面）があるようにも見えた
雲仙岳主峰群（平成噴火前）

参考12

「雲仙岳の秘めたるパワー」P.24

雲仙岳と歴史・伝承③

●雲仙岳の立地と山容～中世から近世～

中世の戦国時代には、スペインやポルトガルの南蛮船が九州に来航するようになり、キリスト教をはじめとする南蛮文化が伝来しました。中国東岸を経由して来航する南蛮船がアクセスしやすい立地を活かし、島原領主の有馬氏はキリスト教をいち早く受容し、半島南端の口之津港を開港して南蛮貿易を行い、南蛮文化を積極的に取り入れました。永禄６年（1563年）、イエズス会による半島内でのキリスト教の布教が始まり、天正８年（1580年）には領主・有馬晴信が洗礼を受け（教名：ドン・プロタジオ）、キリシタン大名となりました。日野江城の下にはセミナリヨ（Seminario、中等教育機関）が創設され、ラテン語、ポルトガル語、日本語や古典の他、音楽、美術、地理学、体育等、当時の最先端の教育が行われ、有馬セミナリヨの１期生から選ばれた４名の少年が日本を代表してヨーロッパに派遣され（天正遣欧少年使節、天正10～18年）、ローマ教皇に日本での布教の成果を示しました。

他方、全国から多くの修行者が訪れていた満明寺・温泉神社の山岳信仰は、キリスト教布教上の大きな阻害要因と見なされ、洗礼直後の有馬晴信によって大小40以上の寺社が徹底的に破壊されました。現在でも、雲仙地獄一帯には“首なし地蔵”が多く見られます。雲仙地獄は当時、硫黄の鉱山と見なされ、イエズス会は領主に雲仙地獄の寄進を求め、領主も内諾していたとされますが、天正12年に攻めてきた佐賀の龍造寺氏を打ち破るのに薩摩の島津氏の援軍を得た結果、敬虔な仏教徒である島津氏の山岳信仰復興の意向に配慮せざるを得なくなり、代わりに長崎の浦上村をイエズス会に寄進したとされています。

殉教記念碑

キリスト教の布教は、九州をはじめ全国に展開されていきましたが、次第にスペイン・ポルトガルの世界征服戦略の先遣隊として見なされるようになり、天正15年には豊臣秀吉が伴天連（バテレン）（宣教師）追放令を、慶長18年（1613年）には徳川家康が伴天連追放文（禁教令）を発出し、厳しい弾圧が始まりました。長崎奉行は、信徒摘発用に踏絵を考案し、信徒に改宗を迫る拷問には雲仙地獄のお湯を用いた“地獄責め”を行い、多くの殉教者が出ました。有馬氏の日向国への転封（慶長19年）、代わりに入って来た松倉氏による厳しい年貢の取り立てや弾圧により、島原藩内の浪人・民衆の反感は高まり、やがて世に言う“島原・天草一揆”へと突き進んでいきました。

大陸からの窓口に位置する雲仙岳・島原半島は、古代より全国に知られた一大霊山でしたが、南蛮船の来航を機に衰退し、今度は南蛮文化が花開いてキリスト教布教の一大拠点となり、キリスト教弾圧が始まれば弾圧の一大拠点になるという、全国でもまれに見る激動の歴史の舞台となりました。

400年前のクリスマスを再現するFestivitas Natalis

参考12

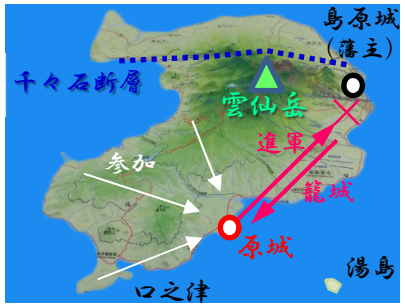
「雲仙岳の秘めたるパワー」P.25

雲仙岳と歴史・伝承④

●雲仙岳の立地と山容～近世から近代～

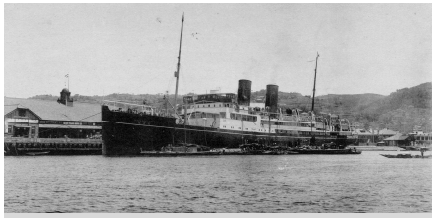
雲仙岳と原城跡
（お城は一揆まつりの際の一夜城）

キリスト教徒の弾圧や厳しい年貢の取り立てが行われた島原半島・天草諸島では、領主への反感が次第に高まり、両地域の間に位置する湯島（談合島）において一揆の計画談合が行われ、寛永14年（1637年）10月、ついに両地域の民衆が蜂起し、「島原天草一揆」が勃発しました。
天草四郎時貞を総大将とする一揆軍は、半島内の各集落に参加を呼びかけ、千々石断層より南側、半島の2/3はほとんどの集落が参加することとなり、廃城となっていた原城（有馬氏時代の支城）を拠点に領主と戦いました。衝撃を受けた徳川幕府は約12万の幕府軍を派遣し、一揆軍は原城に籠城して善戦しましたが、翌年２月に鎮圧され、籠城した約37000人はほぼ全滅となりました。



ここに、島原半島中南部と天草諸島の一部に無人地帯が現れるという史上空前の事態が発生し、幕府は九州を中心に全国の諸藩にノルマを課して住民を集めました。全国各地から文化風習を伴って入植が行われ、多様な文化がモザイク状に分布する現在の島原半島の風土が形成されました。その後、幕府は鎖国政策をとり、貿易港を長崎出島に限定しましたが、出島から入国したシーボルト等は、一番近くの立派な山岳である雲仙岳に余暇で訪れ、その魅力を書物にて紹介し、海外で知られるようになりました（寛政年間の眉山崩壊についても記録あり）。
明治に入って開国され、工業と貿易が推進されるようになった頃、三池炭鉱が開発されましたが、干潟で大型船が入れない三池からの石炭輸出の中継港として有明海の入口の口之津港が選ばれ、明治42年（1909年）の三池港の完成まで、多くの輸出入船で賑わいました。その陰で“からゆきさん”の歴史も刻まれ、昭和初期まで続きました。

明治以降、ヨーロッパを中心に雲仙岳に余暇で訪れる海外客が増え、大正12年（1923年）の日華連絡船の開通と相まって、特に上海駐在の外交関係者にとってアクセスしやすい避暑地として人気を博し、雲仙温泉街は海外文化を積極的に受け入れながら、日本初の海外向けリゾート地として発展しました。



日華連絡船

古代より、九州、全国さらには世界の熱い視線を浴び続けてきた島原半島の歴史は、雲仙岳の立地と山容を背景としたものであり、国立公園第１号、世界ジオパーク第１号につながりました。当地で展開されてきた激動の歴史ドラマを探訪してみませんか？

雲仙岳と雲仙温泉街